OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	韓国における現代政治史認識に関する人類学的研究
Author(s)	太田, 心平
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/47198
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【21】

氏名	太田心平（おおたしんぺい）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学位記番号	第　２０８１６　号
学位授与年月日	平成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学位論文名	**韓国における現代政治史認識に関する人類学的研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　春日　直樹 （副査） 教　授　小泉　潤二　　教　授　中川　　敏　　教　授　栗本　英世

論文内容の要旨

政治史が持つ文化的側面についての先行研究は、個別の事件の間に社会文化の構造を探り、その構造と事件の因果関係を明らかにするという時間軸的な国史研究と、その歴史が適用される構成員の範囲を明らかにするという空間軸的な国史研究に分類できる。現代韓国政治史の社会文化的側面に関する研究でも、権力層と抵抗者が起こす二項対立の物語として国史を見るという時間軸的な見方と、人々の歴史認識の方法を国民国家や民族意識の発露として見るという空間軸的な見方が広く行なわれてきた。このような見方は、そのような国史の因果関係や適用範囲が人々の認識として統合され、時には認識として内破されていくという事例によって導き出されたものだった。これに対して本稿は、韓国における現代政治史認識の統合と内破がどのようにして行なわれているのかを、言説分析と個別事例の参与観察や聞き取りによって再考し、その統合と内破の関係性と、統合と内破では論じえない状況について検討していくものである。なお、主にあつかう個別事例は、韓国キリスト教労働運動体の一つである「Y 教会」、労働運動地下組織である「J 連盟」、そして民主化学生運動世代のウェブサイト・コミュニティーの「カフェ 386」に関するものとする。

韓国現代政治史上で最大の転換点とされるのは 1993 年の「民主化」である。民主化運動に参与してきた組織の構成員たちが語る組織史を紐解いて分かることは、それらが組織のものとしてではなく国史の一部として、しかも権力と抵抗の物語という「大きな物語り」に則してしか語られないということだ。そして、いずれの場合でも「民主化」は死の時代から生の時代への転換という象徴的認識のもとで語られる。個別の組織の歴史も、このようにして物語のモチーフを国史と共有している。

そのモチーフの共有とともに指摘できるのは、人々が政治史を語る際に用いるキーワードの共有である。このキーワードについては、価値の高いことばとして、そしてそのキーワードが示す内容の正統的な継承者であると主張する者を権威づけするものとして、他の国や地域に関する先行研究で取り上げられてきた。だが、韓国現代政治史の物語に登場するのは、このような「美徳のキーワード」だけではない。正反対の性質を持つ「悪徳のキーワード」も共有され、その両方を用いて語られ、進められるのが韓国現代政治史である。政治史の全体に濃密に登場するキーワードにはあらかじめこのような価値が決められており、その美悪の価値なくしてはことば自体が意味をなさなくなっているため、政治史の中の美悪は固定化されていると言える。このような、逸脱を許容しない強固なモチーフとキーワードによって、現代韓国の人々は歴史認識を共有しているように見えることがある。

しかし、このような歴史認識の物語性には内破が指摘されており、韓国現代政治史も近年において同じ兆候を示していると言える。これまで公に検証されることがなかったY教会の教会史やJ連盟の活動史が表象されるにつけ、その歴史表象が国史のモチーフやキーワードの焼き写しであることが分かり、両組織の構成員たちは自分たちの歴史認識と世を行きかう歴史表象との間に乖離を感じて、日常的に自分たちの歴史認識を話し合うようになった。ところが、Y教会の牧会者と活動家と平信徒の間や、J連盟の主体思想派や非主体思想派や立場保留者の間では、これによってさらに細かな歴史認識の乖離が露呈する。つまり、国家や民族の一員としての物語である韓国現代政治史は、組織の歴史の大きな物語を生むが、組織内アイデンティティを持つ一員としての歴史がそれを打ち崩そうとしていくのである。加えて、死の象徴で語られた「民主化」以前の歴史的状況は、そのような内破する歴史の中で、むしろ懐古や郷愁に似た感情を込めて叙述され、むしろ生の象徴に収まっていることが分かる。これまでに絶対的であるかのように叙述されていた死から生へというモチーフも、ここにおいて生から死へという逆のモチーフに置き換えられると言える。このように「民主化」以降の韓国の現代政治史認識は、実際には違ったモチーフによる国史の物語を内在させながらも、「民主化」以前の大きな物語のモチーフとキーワードに従って叙述されるという、いわば「ポスト・ミリタリズム」の状況にあるのである。

この状況は、民主化学生運動世代である「三八六世代」の人々が「民主化」以降に抱く世代史認識において、ますますの問題を提起している。1990年代後半の韓国で三八六世代は、「民主化」に起因する喪失感や損失感の感情を共有する存在とされ、かつ韓国の現代政治を動かす政治主体として表象されてきた。三八六世代の感情に関する表象は、詩や歌の歌詞や小説や映画の題材として多様に行なわれ、社会現象とも呼ばれる広がりを見せてきた。そこに韓国現代政治史の大きな物語が潜んでいるということは言及する必要もない。しかしこの世代の人々は、それらに同感するのみではなく、個々に反論を繰り返してきた。この世代史の内破は文壇や言論界だけではなく、三八六世代の人々の間にも波紋を投げかけ、世代史を語ることが余暇活動の一つにまでなっていく。

問題は、三八六世代が政治史を動かすとしきりに言われてきたことにある。歴史上で続いていく階層や性別などの属性とは違い、生まれては消えるものである世代が、構造的な因果関係で織り成された韓国現代政治史を動かすという論理の危うさは、三八六世代の人々の間で歴史認識の新たな方向へと繋がっていくことがある。その新たな歴史認識とは、既存の歴史の物語性を意識し、歴史に物語性を持たせたくないという人々によって語られていく。しかし、代わりになる歴史の認識方法は見つからず、しかも日常の言語生活には既存の歴史の物語が不可避となっており、彼/彼女ら自身もそのことに気が付いていったのである。国家や民族と距離を置こうとする彼/彼女らの中には、みずからの状況を息苦しいと感じるようになり、社会的には「絶望移民」などと言われながら海外に移民して行く者たちも増えてきた。その中には、そこで初めてコリアンは別の国家にも、別の民族のようにでも、そして別の歴史の物語を持っても、暮らしていけるということに気が付くものが出はじめる。そうしてそのチェーン・マイグレーションが起きていく。

最後に論じた状況は、内破という消極的な変化の状況とは違うものだと言えよう。ただし、外破ということは出来ない。しかし、本稿が通して見てきたように、国史の統合や内破は現象として起きているだけではなく、その当事者たちに認識され、議論され、超越に向けた行為を生むようなものなのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は韓国における現代政治史の認識を、1998年以来の現地調査にもとづく豊富な資料と幅広い知見を発揮して、あたらしく提起する。著者は韓国で「国史」と呼ばれるものがどのように統合と内破を繰り返すかについて、韓国キリスト教労働運動体の一つである「Y教会」、労働運動地下組織である「J連盟」、および民主化学生運動世代のウェブサイト・コミュニティの「カフェ386」における参与観察をもとに、ダイナミックに描き出している。

論文は7章より構成されており、はじめの1章は研究の背景と概要に充てられる。韓国の「国史」は一般には国家の「公式的歴史」と民衆の代弁する「対抗的歴史」の二つによって語られるが、両者が根底の基盤を共有しながら大きな物語を形成しており、この物語に抗する語りは内破として産出され、もとの大きな物語へと統合されていく、と

著者は論じる。

つづく２つの章では、「国史」の集合がいかに可能になるのかが丹念に例証されている。大きな物語を構成する「抑圧と抵抗」や「死から生へ」といったモチーフが具体的に明らかとなり（２章）、そのモチーフへの統合が「民衆」「統一」などのキーワードをつうじていかにおこなわれていくのかが、Y 教会と J 連盟の事例にもとづいて呈示される（３章）。

４章と５章ではこれに対して、「国史」の内破する状況を検証する。組織の構成員たちが自分たちのアイデンティティを賭けて、1993 年の「民主化」以降の経験を別のモチーフの形で再編しようとするが、彼らの特有な語りが大きな物語へと反映されることはなく、彼ら自身が大きな物語に拘束されたまま、社会的な孤立感を深めていく様子が明らかになる。

筆者が主な調査対象としたのは韓国で「三八六世代」と呼ばれる民主化学生運動世代であり、「民主化」以後の社会の急変によって喪失感を深めた彼らの中には、国家や民族から距離を置くあたらしいコリアンとして海外に移民していく者が年々増えている。６章はそんな人々に光を当てて、「国史」の統合でも内破でもない状況を、「国史」から解き放たれる動きとして提起する。

以上のように本論文は、現代韓国の重大な問題を豊富なデータにもとづいて分析することによって、現代政治史の認識のダイナミクスをきわめて明晰に呈示している。テーマの斬新さ、呈示資料の重要性、議論の明解さによって、本研究はすでに日韓両国の韓国研究者から十分な評価を得ている。これらのことにより、博士（人間科学）の学位授与にふさわしいものと判定する。